

## 第2章 銃後

広島での被爆

# 助かった命で伝えること

越智晴子さんのお話から

○ハイカラ 洋風でしゃれていること。

○B29 第二次世界大戦末期に登場したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。一万mの高度を飛んだ。北海道外の日本の空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島、長崎への原爆投下にも使われた。

○瓦れき 壊された建物の破片など。

私は小さいときから神戸に住んでおりました。神戸は山と海が近くて、ハイカラな街で、街に出るといろいろな外国の人に出会います。とても素敵な街でした。

そのうち、広島で軍医をしている兄から電報が来て、どうしても行かなければならない用事で広島に行きました。広島は全く空襲を受けていませんでした。「広島は部隊があり兵隊がたくさんいるので、やられないのだな」と思いましたが、そうではなかったのです。

昭和二十(一九四五)年八月六日の朝、空の高いところから、B29の爆音が聞こえてきました。突然、ものすごい火の玉がビシャーッとという音をして飛び散ったのです。大きな火の玉で、周りは白くなっていました。ビシャーッと飛び散ったときに、水しぶきのようなものが火の玉の周りから飛びました。私は「太陽が落ちた」と思いました。それほどものすごい火の玉が突然炸裂しました。

「あっ」と立ち上がろうと思ったら、バーンともものすごい風が来ました。そこらの家を全部壊して、瓦れきを巻き込んで吹いてくるのです。私は、背中を風の来る方に向けて伏せようと思いましたが、ひざをついたところで胸まで埋まってしまいました。三回くらい風が吹いてきました。その度に風が壊した建物の瓦れきを持っていくので、体がだんだんと埋まっていくのです。私は「もう死ぬのだ」と思いました。でも、「死んでいくのだ、逃げることもできない」と思うと全然恐ろしくないので。ただ、母にもう会えなくなると思い、「お母さん、お母さん、お母さん、もう一度お母さんの顔が見たい、お母さんの声が聞きたい、お母さん、お母さん、お母さん」と

〇二の腕 肩とひじまでの間。

頭の中で呼んでいました。  
ふと気がついたら風が止まっています。兄たちはどうしたんだろうかと思えば、目の前に兄が頭のとっぺんから足の先まで血だるまになって立っていました。兄がお化けみたいに見えるので、もうギョツとして後ろに下がりました。

私も全身に四十ぐらいの傷があり、二の腕から肉が噴き出していました。その時は気づいていませんでした。いっばい傷があるのに痛みを感じなかったのです。兄嫁さんは、髪の毛が爆風と恐怖のため、まるで針金が逆立ったようにチリチリになって、それが、顔中に覆いかぶさっていました。顔も真っ赤な血で覆われていました。私の横にいた四つの坊やが三メートルぐらい吹き飛ばされて、おなか裂け、頭もけがをしていました。

兄は軍医だったので、どんなことがあっても軍隊に行かなければなりません。暑くて半ズボン一枚だったので「私がみんなの着るものを探してくるか」と、兄たちを道路に逃がしました。家の中は歩けない状態でしたが、軍服と軍刀を探し出しました。玄関に行くとき、皮のブーツもありました。自分の靴とみんなの靴も見つけました。それから、大事なも

〇軍刀 軍用に共された  
刀剣

助かった命で伝えること



イメージ図

原爆投下直後に広がった原子雲(きのこ雲)

○モルモット  
実験台に  
された人

のを荷づくりしたふろしきを三つぐらい探し出した時、何だか膝の後ろが冷たいのです。見ると膝の後ろから血が噴き出していたので慌てて押えました。すると、目を開けようと思っても、目が開きません。出血で貧血状態になってしまったのです。「もうだめだ」と思いながらも、持ち出した荷物を持って庭まで行きました。お隣の奥さんが私を指差して「あそこで、今、人が死んでいくよ」と叫んでいました。「ああ、私はもう死んでいく人の姿なのだ」と思い、気を失いました。

でも、絶対に死んではいけない、兄のところに届けるのだという気持ちで、パッと目が開いたのです。私があまりにも遅いので、兄も血だらけの体で探しに来てくれました。兄が「道路まで出て、広島の方を見たら、広島の方には何もありません。全部吹き飛ばされて、壊れてしまっている」と言いました。そして「ビルマの戦場にいたときでも見たことのないような異様な姿をした人がいっぱい死んで倒れている。けが人も今まで見たことのない不思議な人の姿だ」と。「これはアメリカが何かものすごく威力のある新しい爆弾を発明して、それをテストするために、広島の人たちをモルモットにしたのだ」と言っていました。そのことが私の頭の中にとびりついています。



イメージ図

爆風と熱で髪が逆立った人



それから道路まで行ったら、向こうから変な姿すがたの人たちが、よろよろと走ってきました。子どもも大人もみんなまん丸の顔をして、目が小さく、風船みたいな顔をしていました。その人たちの体は黒いのですが、ところどころは赤いのです。ピカッと光った光を正面から浴びて、全身にやけどを負おったのです。全部が水膨みずぶくれになって、目が細くなっているのです。熱で焼かれた体は黒くこげているけれども、皮がむけたところは赤い肉が出ています。その人たちは手を左右に振りながら、ポロ切れを下げているように見えました。しかし、私がポロ切れだと思っていたものは、やけどで皮がむけたものだったのです。むけた皮が肩かたからズルッと垂たれ下がってき、つめの生はえ際ぎわで止とまっていたのです。その人たちは必死で原爆げんぱくが落とされた方に走って行きました。百メートルほど先に赤十字病院があったので、助けを求めたのだらうと思います。この世の人ではないような、お化けのような人たちが広島ひろしまの街を逃にげ惑まどっていました。広島では、この日、ピカッと原爆が爆発ばくはつした瞬間しゆんかんに十万人の人が亡なくなりました。

私たちが、戦争や原爆の恐おそろしさを知らないでいると、また戦争をしたと思う人や「原爆よりもっと恐おそろしい爆弾をつくって落としてみたい」と思う人が出てくるかもしれません。ですから、戦争に遭あって原爆を体験した人から聞いた話を伝えていって、絶対ぜったいにそんなことが起こらないようにしてほしいのです。戦争は人殺しではありません。正しい戦争なんて絶対ぜったいにないのだから、そういうことをすっかり頭に入れておいてもらいたいと思います。

## DATA

平成23年度白石区平和事業  
聞き取り

- ・平成23年8月29日
- ・北白石小学校



## 越智晴子(おち・はるこ)さん

- ・大正12(1923)年生まれ
- ・札幌市白石区在住